

福沢諭吉の文明観と人間観

——進化心理学からのもう一考——

坪 川 達 也

- 一. はじめに
- 二. 進化生物学と進化心理学
- 三. 『文明論之概略』に見る福沢諭吉の文明観と人間観
- 四. そのアプローチに関する考察
- 五. 最後に

一. はじめに

筆者の専門は、魚類の社会行動を通じた進化生物学・進化心理学（神経科学）であり¹⁾、福沢研究に関しては門外漢との誹りを相も変わらず免れないが、縁があって2008年に慶應義塾創立150年記念法学部論文集：慶應の教養学に「福沢諭吉の人間観における負の要素—進化生物学的視点からの一考—」という論考を掲載していただいた²⁾。前稿では、福沢が人間（じんかん）交際上、もっとも害のあるとした「怨望」と「惑溺」を人間観の負の側面として取り上げ、神経科学研究で明らかになった認知（認識）・情動という神経回路構造や機能特性との対応から、反集团的利己的感情は「怨望」、反知性的認識は「惑溺」と解せることを示し、福沢の指摘は、進化生物学的視点、とくに進化心理学的視点に一致していることに驚いたと述べた。今回の論考は、その後の進化生物学・進化心理学の発展を追いつつ、福沢の人間観および文明観の関係、そのアプローチの特徴について、さらに考察を深めたい。

二. 進化生物学と進化心理学

進化心理学とは、進化理論を駆使しながら人間の心理を理解しようとする試みである。人間の心は今も、祖先たちに有利だったパターンにならっている。有利な状況をつくるために特定のパターンを習得することは「適応」と呼ばれている。人間の能力のすべてが進化を通じて獲得されて来たわけではないが、心理を含む複雑な機能特性は、適応を通じて獲得された可能性が極めて高い。あるいは、少なくとも過去の適応の名残である³⁾。例としては容貌認知、個体識別できることは高度な社会行動の前提となるから、扁桃体や側頭葉の一部が破壊されると容貌失認になることも特定の神経回路がこの機能を担っていることを示す。

進化論を提唱したのはダーウィンだが、それは1858年、ロンドンリンネ協会の会合で発表された。わずかその4年後の1862年、福沢諭吉は2度目の海外体験である文久遣欧使節としてロンドンを訪問する。筆者は2014年～2016年の塾派遣留学（ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジ）に伴い、福沢のロンドンでの足取りについて現地調査を行った。その足跡については、近代日本研究センター（現：慶應義塾福澤研究センター）ワークショップで発表している⁴⁾。

ダーウィンの進化論は、当初大きな反発を受けたものの（現代でも宗教界から反発はある（Ex. アメリカ）、自然科学としては重要な理論になり、その後の発展を通じて進化生物学として成立した。進化心理学は人類学・考古学・心理学、神経科学を中心としたその一分野になる。

自然科学の理解では、生物も物質（原子・元素）で構成されるという唯物論であり、生命とは壊れる前に造る（核酸レベルで複製する）状態と解釈する。進化の動因、遺伝子の突然変異は化学的事象でランダムに起こり盲目的である（目的論的でない）。しかし環境（外部の自然環境だけでなく、同種集団内を含む）中で自然選択・淘汰がおきる。自然選択・淘汰とは、全ての生物は死ぬ（＝物質の状態に戻る）ので、複製が起きる進化の瞬間まで生きる（存在）すること、もしくはそれ以前に死ぬことである。ダーウィンの進化論で

は自然選択・淘汰の時に、有利・不利の少なくともわずかな違いがあるとされたが、他の形質に関わる偶然を認める中立進化説（遺伝的浮動）が今では認められている。

生命は複製する核酸レベルから、分裂する原核生物・真核生物レベル、生殖する多細胞生物（個体）レベルへと 40 億年をかけて進化してきた。5 億年前古生代直前に動物群が生じると、脊椎動物も生まれ、そこから哺乳類が新生代の 6600 万年前に放散する。ヒトを含む霊長類もこの中から生まれる⁵⁾。この霊長類には社会性（特定の場所で、同種個体が互いに認識し、作用し合っている集団⁶⁾）の動物も多い。霊長類でヒトにもっとも近いのはチンパンジーおよびその後（現在より 200 万年前）にチンパンジーから分岐したボノボである。チンパンジー、ボノボも社会性の動物であり、小規模血縁集団として群れをつくり、アフリカ西部のジャングルに生息している。

ヒトの祖先はアフリカ東部のジャングルからサバンナに変わった環境を生き延びた。テナガザル、チンパンジーでは手はブラキエーション（腕渡）の手段であるが⁷⁾、直立二足歩行（長距離の移動に適している）により移動手段から解放されたヒトの手は、道具使用・作成に利用される。実は道具使用については、動物でも確認されている（チンパンジーのシロアリ釣り、カレドニアアカラスの枝による虫取り、魚類ベタによる石を利用した貝割など）が、あくまで一次道具使用であり、人間の道具使用の特徴は、二次道具使用（道具をつくるための道具使用）が特徴であるとされている（動物行動学・動物心理学による知見⁸⁾）。また、もう一つの特徴である火の使用の化石は自然発火との区別が難しいが、火の使用は 40 ~ 12.5 万年前からと推定され、これがすべての科学技術の元となる。

言語（言葉＝話し言葉）は、聴覚的要素である音素、単語（音素の集まり）、文法（単語の順序）でなりたっている。神経科学からは道具作成と言語学習の関係が示唆されている。道具を作成するには順序が大事だが、この調節が前頭・頭頂連合野で行われており、道具を作成することで前頭・頭頂連合野が広がり、単語を順序で構成する文法が生まれたのではないかとする仮説がある⁹⁾（ヒトで文法を担当する運動性・感覚性言語野が対応する部分にある。脳外

科学からも、失語症に失行症が伴うことが多い¹⁰⁾。

言葉は情報を伝えるが、情報の概念に関して2点強調したい。現代は情報革命後の世界であり、ソフトウェアの話題は多いが(Ex.AIなど)、ハードウェアなしのソフトウェアはありえないこと(ヒトの場合、言語野=脳)、また情報はモノとちがいで、共有してもなくなるらないことである。

動物のジェスチャーでは自身の経験(自身の試行錯誤学習の結果)か、直接にみた他人の経験(これも情報)までを伝えることができる(他個体の行動観察学習)が、音声言語の獲得は、直接知らない他人の経験(情報)を伝達することができる。例えば「このキノコは毒である」は狩猟採集生活において非常に重要な自然環境の情報であるが、動物では本人が食べて死にかけたか、誰かが食べて死んだのを見たかのどちらかであろうが、ヒトの場合、直接見えていないその後の世代においても、この経験(情報)を伝えることができる。したがって、環境の情報は蓄積し(むろん石器の作成など技術についても)、口伝の文化(生活様式)になりうる。ヒトの狩猟採集生活においては、現地環境の具体的かつ詳細な膨大な情報が必要である。ダーウィンと同時に進化論を発表したウォレスによれば、文明生活を送らない狩猟採集生活に高度な知能は必要ないと考えたが、現在では、具体的と抽象的知識の違いであり、狩猟採集生活にも高度な知能は必要だと分かっている¹¹⁾。ヒトの祖先はアフリカで約250万年前からの繰り返す更新世の氷河期を生き延びた。20万年前、解剖学的現代人ホモサピエンスになったが、7万年前の出アフリカ後(大躍進¹²⁾)、熱帯から温帯、極地の寒帯に至る環境にヒトが適応できたのも、この文化の力によるもので、16万年前までに、全世界(ユーラシア大陸、オーストラリア大陸、北米大陸、南米大陸)への進出を果たす。ヒトはこの時点で最上位捕食者となっており、ヒトほどの大型の哺乳類で、これほど広い分布域をもつ動物はいない。

ヒトの特異性と考えられた社会・道具・言葉は、他の動物における発見により、ヒトの独占物ではなかったことが分かったが、より詳細なヒトの理解も生んだ。その結果、チンパンジーとの分岐後、大躍進までのヒトのもっとも特異性を示している行動特性(行動も化石に残らない)は、「超社会性」と

もいえる個体と個体の協力関係がみられることである¹³⁾。進化哲学者のザウアーは、道徳（モラル）を、自発的に個人の私利を犠牲にして全体の公益を優先する選択をさせる心理特性（メカニズム）と定義し、その発明こそがヒトと他の動物を分けたと指摘する。社会行動を行う動物は、多かれ少なかれ集団の維持を目的とした行動を取るが、ハチ、アリやシロアリなどの真社会性昆虫では完全分業で社会行動し、自己の生殖さえ犠牲にするが、それはフェロモンを含む遺伝的な行動特性であり、ほとんど個体による選択の幅はない¹⁴⁾。一部の魚類は遺伝的な性向として同種個体に対する接近行動（集合行動）を示して数万の個体の大きな群れを作り捕食行動に抵抗するが、それ以上の協力的行動は取れない。それに対し、状況に応じ自発的に柔軟に協力できる点がヒトの社会行動の特徴である。

なぜ、協力がそこまで重要なのか。ヒトの祖先は肉体的に当時のサバンナの捕食者より劣っていた点（強い爪も牙もない）が挙げられる。だからこそ互いに守りあうこと（協力）が必須であった。そしてヒトの祖先に霊長類に特有の知性の高さがあった（外適応）。結果、ヒトはモラルを発明し、所属集団なしでは生きられない、孤立に弱い動物になったともいえる。この特性は現代まで残っており、心理面に根付いている（たとえば、仲間外れは深刻なトラウマを残す）。

蓄積的文化進化（後述）と関連して、学習能力の高いものほど、生殖に成功しやすいため、全体として、世代から世代へ学習能力が高まっていく。これは大脳皮質を中心とする知能がヒトの集団の中で選択された結果ともいえる。そして脳容量（大きさ）もチンパンジーの 400CC からホモサピエンス 1300CC まで増加した。

脳の増大に伴い社会で維持できる集団のサイズの増大も始まったと考えられている、チンパンジー、アウストラロピテクスの集団サイズは 50 人までと考えられているが、ホモサピエンスは大脳皮質の拡大で 150 人までグループが、制度（後述）なしに維持できると考えられている。この数はダンバー数と呼ばれている¹⁵⁾。集団の拡大により、自然に対する利点（技術）だけでなく、社会から得られる利点（制度）のスケールメリット（規模がもたらす利

益)が生じる。さらには、20万年前までには、進歩した石器、投擲能力による槍、言語を持つ解剖学的現代人ホモサピエンスになり、氷河期の巨大動物の狩猟を行うようになった。

さらに7万年前に大躍進を起こした行動学的現代人は、現在のヒトとほぼ同じ能力を遺伝的にもっていると考えられる。上記の種形成段階(遺伝的進化)の変化を通して、協力とそれを維持するモラルの明るい面を見たが、協力を行うのはあくまで所属集団(小規模血縁集団)であればおよそ150人までの親密な関係を維持できる限界人数(=ダンバー数)内であり、これは人類学の狩猟採集生活の調査や現代の軍隊の中隊レベル(一人が指揮できるレベル)やSNSでの親密度の高い集団の人数(フォロワー数はもっと多いが)¹⁶⁾でも確認されている。それ以上の人数では、集団が分裂し、自分達以外の他集団が成立し、その見知らぬよそ者と争うという暗い面が表れてくる。この心性がよそ者嫌い(Xenophobia)になる。ヒトは、内集団には自発的に協力する一方、外集団には攻撃的である(内集団・外集団バイアスとして知られている)。

またこの集団内の協力について、ゲーム理論から囚人のジレンマという形で難しい問題を突きつけられている。囚人のジレンマは、2人の個人が協力したときに全体としてもっとも高い利益(公益)を得られるが、個人としては相手に協力させて、自分は非協力を選ぶと個人としてもっとも高い利益をえられるという状況(ほぼ普遍的な)である。この場合、個人の合理的な選択は、非協力(裏切り)であり、協力は選ばれず、進化的にも選択されないという上記との矛盾が起こる(協力は裏切りに弱く、非協力者がさらなる非協力を呼び集団の協力行動が崩壊してしまう)。「共有地の悲劇」や「フリーライダー問題」として知られるものである。これに対してヒトに存在するのが懲罰心理である。不公平感がもとになって怒る感情は動物にもみられるが、ヒトの懲罰感情は利他的懲罰である。非協力的な個体(合理的であっても非倫理的選択)に対して、個人的利益(私利)を相殺する以上の不利益を課したい(攻撃)感情である(狩猟採集生活では、場合によると追放、殺害=死刑に似たる)。この懲罰心理をもつことで、所属集団内の協力に関する確率が上昇

するが、非協力が完全になくなることはない（個人として合理的だから、それを選ばない自制が至らないことがある）。同じ論理課題でも論理学そのものではなく社会問題（Ex. 未成年飲酒）として出すと成績がよくなる傾向がヒト全般にみられ、この「裏切者」検知といわれる認知機構はこのためのものである¹⁷⁾。

集団内においては、さらにより広範な集団的統制が行われた（現在の文明社会でも行われている）。人類は規範に対する違反を非公式かつ繊細に監視することでモラルを維持してきた。これが社会的名声であり、噂話（ゴシップ）を通じて集団に共有される。噂話は、霊長類における毛づくろいの延長であり社会の団結を強める作用を持ち、言語はその過程で大きな役割をもったと考えられる。毛づくろいは一對一の直接の接触が必要な上に時間がかかり、これが霊長類でダンバー数が決まる理由の一つになっている。一方、ヒトの言語の場合、一度にたくさんの仲間にシグナルを送れる上、伝聞も可能である。そうやって作られる社会的名声、他人の目を通し、他人に如何にみられるかは人間にとって重大な意味を持つ（承認欲求¹⁸⁾）。ヒュームが指摘しているが「口がくさいと指摘された人物は、なんの損害もないはずなのに、深く傷ついてしまう」。実際、現代人の日常的会話の70%がゴシップであることが確認されている。また多くの民族において、社会的名声を失うことは、死刑に変わる穏やかな罰ではなく、極刑である。

1万2千年前に最終氷期の明けたことに伴い、全世界的に各地で定住がはじまって以後は構築段階（文化的進化¹⁹⁾の蓄積した情報（文化進化）の影響が大きくなっていく（上述のように文化はそれ以前から起きていて人類を助けていたが）。新しい情報・技術である「制度」の確立が必要とされた。「制度とは、社会生活（協力行動）」を営むために皆が従っている慣習・規範＝情報を体系化したものである。過去数万年以上に渡りダンバー数150人の小規模血縁集団から数百人規模の部族社会への移行は下記の一連の変化を含めて「新石器革命」（トフラーの「第三の波」では「農業革命」²⁰⁾）と呼ばれている。集住（散村レベルだが）に伴うトラブルの解消にはビッグマン（村の実力者）と掟（慣習）で対処し、家屋の建築や、移動制限が解けて蓄積されるかまど

や重量道具（石臼）、そして採集から農耕技術の発展が起きる。農耕には、人為淘汰（人工進化）を繰り返して植物の原種から品種の作成（メソポタミアの小麦、長江文明の米、マヤ文明のトウモロコシ、すべて新生代後半に増えたイネ科の植物）、これらを利用し牧畜も始まる（野生種から家畜種）。数千年かかるこの人為淘汰を経て、土地の利用効率は最終的には100倍を超える結果、余剰作物が生まれた。人口増加の結果、不平等化と血統主義が起り、数千人レベルを束ねる首長社会（首長（チーフ）は世襲となり階級）が生まれる（新石器時代（地域によりちがうが、メソポタミアでは8000年前²¹）。数千人規模の社会が生まれると、社会維持のために役割の分化が必要となってくる。不足の材料を交易する商人、土器制作に専従する職人、土地をめぐる争いから専門の兵士、収奪から税の発明、税を正統化するための古代宗教を司る神官などである。その後、王が続べる5万人レベル都市国家が生まれる（メソポタミアでは5000年前²²）。

この約5000年前には、文字が発明される。文字は、聴覚的言語学的規則の視覚的再現技術であり、難しい技術である。少なくとも歴史上三回の発明（楔形文字、亀甲文字、マヤ文字）しか確認されていない。メソポタミアについては簿記起源説があり、「トークン（文字の起源）の使用目的が交易に伴う物資の数を示す伝表のような役割があったと推測されている」²³。文字で情報の伝達が正確になる（話し言葉の口伝に比べれば圧倒的に変化が緩やかで、公共放送などのマスメディアの存在する現代においても話し言葉の世代間の違いは観測できる）。それによって蓄積の速度が上がる結果、技術に加え、古代宗教、神話、歴史が記録され、有史年代が始まる。文明は文化と制度を持つが、文字の誕生とともに強化された。ここより研究分野は、人類学・考古学から歴史学にはいる。古代、中世²⁴、ルネサンスと近世、近代の産業革命、帝国主義、そしてWWI、WWII後、グローバル化と情報革命を経て現代に至る。

アリストレスは人間を「社会性動物」と「言語を授かった存在」としたが、これはストア派によっても「人間の構成素質の中で第一の特徴は社会性である。第二は肉体的欲情に対する抵抗力である（言葉（ロゴス）＝理性）。」と

されている²⁵⁾。しかしながら、現代になってあらためて理解されたのは、人間は上記のように蓄積的文化（文明）を有する唯一の動物であるということである。現代にいたるまで、文化的なノウハウが数多くの重要な発展を促し、第一に技術の改善と経済の効率化により、これまで以上に大きな集団を物質的に満たすことが可能になった（人口爆発の結果、現在 80 億人）、第二に、文化的ノウハウ蓄積のお陰で、私たちは自ら打ち立てたルールに従って生きられるようになった。ルールが人間の生活様式の多様化を可能にし、人間を生物として生まれ持った本能から解放した。つまり文化が多様性を生み出した。加えて、言語（言葉+文字）、国旗、儀式などを通じて社会の境界を象徴的に可視化する能力を人間にさずけることで、生物として人間に芽生えていた集団心理をさらに強化した。第三に、人間は社会的学習に依存するようになった。つまり、個人の能力と知識を他人に依存するようになった。この発展がモラルと知識（事実）の融合をもたらし、さらに集団的になった。学習が成功するか否かは、誰を信頼するかで決まり、誰を信頼するかは、価値や基準を共有するかによってきまるからである。文化とは多様性であり、柔軟性であり、集団形成であるが、同時に（集団への）依存性、個人の無力さを意味している。そしてモラルが人間の共同生活を「拡大可能」にしているのである。

三. 『文明論之概略』に見る福沢諭吉の文明観と人間観

さて前置きが多大になったが、本論の本旨についても進めていきたい。前稿では、福沢の個人を中心とする人間観を論じるため、『学問のすゝめ』第十三章「怨望の人間に害のあるを論ず」を中心に取り上げた²⁶⁾。今回は、『文明論之概略』（福沢諭吉著、松沢弘陽校注、岩波文庫、1995²⁷⁾（原本の発行は 1875 年、今年（2025 年）発行 150 年を迎える）より緒言、第一章「議論の本体を定ること」、第二章「西洋の文明を目的とすること」、第六章「智徳の弁」などを中心に取り上げ、福沢の人間観と文明観のつながりと進化心理学的な文明観と人間観との比較を行っていきたい。以下 3 点を取り上げる。

①精神発達論

「文明論とは、人の精神発達の議論なり。その趣意は、一人の精神発達を論ずるにあらず、天下衆人の精神発達を一体に集めて、その一体の発達を論じるものなり。故に文明論、あるいはこれを衆心発達論」というのも可なり。」(緒言)

これは『文明論之概略』の冒頭であるが、二節で筆者が長々と進化心理学を通じてヒトの心理特性についてのべてきたのと同じように、まず福沢も文明論の中に人の精神発達(心理)をおいている。しかし個人に着目しただけでなく、それを一体に集めて衆心発達論としているところも、累積文化進化に通じる所でもある。福沢においては、将来の手段としての「スタチスチク」(四章)(=統計学)を挙げていることを、現代のヒト・動物の心理学研究においても統計学が外せない手法であることを指摘しておきたい。

実際の議論として、福沢は「文明論とは人の智徳の進歩なり」(第四章)として、徳(Moral)と智(Intellect)を個人(一心の内)の私徳、私智および社会(人間交際上)の公德、公智に分けて、その関係を第六章で議論している。

「知恵と徳義とは、あたかも人の心を両断して、各その一方を支配するものなれば、(中略)…二者を兼備するにあらざれば、これを十全の人類というべからず。」(第六章)

として、徳(Moral)と智(Intellect)をともにヒトの特性としている。進化心理学・神経科学からの視点においては、情動(大脳辺縁系)と認知(大脳皮質)の二重回路への指摘ともとれる。

また脳内で「徳」という(価値)判断をすることから、この判断の一部には、「ヒトの情動」に相当する意味が読める。二節で示したように、進化心理学においては、ヒトの心理特性モジュールは高度に保存されており、その結果と以下の福沢の指摘は一致する。

「固より私徳の条目は、万世に伝えて変ずべからず、世界中に通用して異同あるべからず。」(同第六章)

「徳義の事は古より定まりて動かず。」

「徳義は一人の行いにて、その効能の及び所は先ず一家の内にあり。」

「家族の間は情を以て交わりを結び、物に常主なく与奪に規則なし。」(第七章)

「肉縁の遠きに従って、その情合を用いることもまた次第に減少さざるべからず。」

その私徳の一部は、まさにヒトに共通の情動である。更に情動（社会行動を含む）が、理性により広がる過程は同じく二節に示した累積的文化進化の過程（文化的ノウハウ蓄積のお陰で、私たちは自ら打ち立てたルールに従って生きられるようになった）にも相当し、私徳が、受動的でなく主体的努力により進退するものとし、以下のように智恵（理性）により拡がるという考えに一致する。

「智恵は学びて進むべし。…徳義は教え難くまた学び難し、一心の工夫にてとみに進退することもあるものなり。」(第六章)

「右の如く、私徳は他人の力を以て容易に作るべきものにあらず。たといよくこれを造るも、智恵に依頼せざれば用に為すべからず。」(第六章)

結論として、さらに二か所をあげて議論する。

「而してこの四者の内にて最も重要なるものは、第四条の大（公）智なり。けだし、聡明叡知の働きあらざれば、私徳私智を拡て公德公智と為すべからず、あるいは公私相戻りて相害することもあるざるべし。」(第六章)

「…徳義とは一人の行状にてその効能の及び所狭く、智恵は人に伝わること速やかにしてその及び所広し、徳義の事は開闢の初より既に定て進歩すべからず、

智恵の働は日に進みて際限あることなし、徳義は有形の術を以って人に教ゆべからず、これを得ると否とは人々の工夫にあり、智恵は一度びこれを得て失うことなし、智徳は互いに依頼してその効能を顕すものなり、善人も悪を為すことあり、悪人も善を行うことありとのことを、説き示したるものなり。」(第六章)

徳義と智恵の違いをまさに情動と理性、遺伝的進化と累積的文化進化との差と対比させるように議論している点が、進化心理学との相似点である。

②本性と習慣の区別

「習慣の久しきに至りては、殆ど天然と人為とを区別すべからず。その天然と思ひしもの、多はして習慣なるのあり。」(序論)

上記は①であげた序論の部位のつづきであるが、本能(天然)と学習(人為)、そして習慣の区別に大きな注意を払っている点である。その中でもヒトの本性(本能、天然)についての言及は

「人の性のまま備わるるものは本なり、生まれて後に出来たるは末なり。」(第三章)

「現来、人類は相交わるを以ってその性とす。」(第三章)

などもある。

この本性について、進化心理学ではある行動パターンが生得的(=天然)、より正確に言えば、進化によって引き起こされたものか否かを確かめる手段は存在する。ある能力が(a)非常に早い段階で発達し、(b)どの文化にも等しく現れ、(c)変えるのが困難なもしくは不可能な場合は、生まれつき備わっている特性と見なすに値する²⁸⁾。

二節においては、複雑な機能特性は、適応を通じて獲得された可能性が極

めて高い。あるいは、少なくとも過去の適応の名残であることを示したが、この本性に関する重視は①の徳義に関する議論にも関連している。

③事物のあとに倫理

「軽重、長短、善悪、是非等の字は、相對したる考より生じたるものなり。輕あらざれば重あるべからず。善あらざれば惡あるべからず。故に輕とは重よりも輕し、善とは惡よりも善しということにて、此と彼とを相對せざれば輕重善惡論じるべからず。かくの如し相對して重と定り善と定りたるものを議論の本位と名づく。」(第一章)

「右の次第を以て事物の利害得失を論ずるには、まず利害得失の関るところを察して、その輕重是非を明らかにせざるべからず。利害得失を論ずるは易しいえども、輕重是非を明らかにするのは甚だ難し。」(第一章)

「物の尊きにあらず、その働きの尊きにあり。」(第二章)

「故にいわく、物ありて然る後に倫あるなり。倫ありて然る後に物を生ずるにあらず。臆断を以て先ず物の倫を説き、その倫に由て物理を害する勿れ。」(第三章)

「故に事物の得失便不便を論ずるとは、その事物の行われるべき時節と場所を察するというに異ならず」(第七章)

これは丸山眞男先生の先行研究でも指摘されている点である福沢の価値判断の相対性を示す部分である。「一定の具体的状況が彼に一定の目的を指定させる。そうしてこの目的との関連において初めての彼の事物に対する価値判断が定まってくる。従って、目標が状況に応じて推移すれば、それに伴い彼の価値判断も変化せざるをえない」²⁹⁾。

この価値判断の相対性だが、これは進化心理学にも言える³⁰⁾。二節にも書いたが、進化は盲目的であり、生存(生殖)にいたれば倫理は問われない。その上で議論したように、ヒトの社会性は、変化が早く厳しい環境の中で、生存に必要な協力関係をもたらすために進化してきた。その結果、「モラルは、卑しい目的のために行われるとして人間の道徳基盤を為す」のであ

り³¹⁾、他集団への攻撃性、集団内でも過大な懲罰感情であったり、裏切りが個人の選択として合理的であったりするのである。この福沢の価値判断の相対性も進化心理学と相性がよい。

四. そのアプローチに関する考察

さて読解を通して、筆者が気づいたのは、福沢の著述の個別的内容（智徳の弁など）のみならずそもそも課題へのアプローチの仕方が進化心理学に近いという点である。

「天下の人心を一体に視做して、久しき時限の間に広く比較して、その事跡に顕わるる物を証するの法、即これなり。」（第二章）

これなどはまさに二節で行った進化心理学の解析と同じ手法に着目している証拠である。

19世紀の福沢は当時の生物学および進化論は知っていたが、21世紀に発達した進化心理学は知らない。なぜこのようなアプローチの類似性が生じたかの理由について考察していきたい。ここでも以下3点を取り上げたい。

①啓蒙思想の影響

福沢は啓蒙思想家であり、先在の啓蒙思想家から影響を受けたことは論を俟たない。しかし、その詳細をみると、福沢が『文明論之概略』を著するにあたって、ギゾー（仏）『ヨーロッパ文明史』、バッケル（英）『イングランド文明史』、スペンサー（英）『第一原理』『社会学原理』、ミル（英）『代議政治制』『経済学原理』などの啓蒙思想の著作を参考にしたことは松沢弘陽先生の『文明論之概略』の解説、安西俊三先生の著作にある³²⁾。特にスコットランド啓蒙思想の影響が大きいことも示されている³³⁾³⁴⁾。しかしながら多様な啓蒙思想家に影響を与えた初期の啓蒙思想家、政治哲学者ホブズの「自然状態」というアイデアに、まず注目したい（さらにホブズ

の「自然状態」の起源になったのが、国際法の父、グロティウスの人の本性を考えた自然法の世俗化と、そして生じた自然権の考えだと指摘されている³⁵⁾。

「自然状態」とは政治体を構成する以前の人間の状態を仮定し表現したもので、その結果、法(掟)を持たない「人間の本质」(本性)を想定したものである³⁶⁾。ホブズが分析的に導き出した原子(アトム的)人間から構成的に人工の国家を導き出すという科学的手法をとっていることは、科学的手法である進化心理学のアプローチに非常に近いと考えられる(進化心理学も、さまざまな自然、社会、人文科学の知見よりの、現時点においての仮説である)。またホブズの唯物論的(無神論と批判された)(=機械論的)世界観では、自然法が存在せず、自然権(自己防衛)の権利のみが存在することから、「自然状態」では有名な「万人の万人による闘争」になると想定している。そして理性を持つ人間は、絶対者(リヴァイヤサン=政府)に対するこの自然権の譲渡により闘争状態(戦争)を抜けだし政府をつくることができるとまとめられる。

ホブズと対比するため、初期の啓蒙思想家のロックを取り上げる。ロックの仮定する「自然状態」では、神の権威の元、理性による自然法的平和を自然法と認め、個人が自然権として「完全に平等で自由な」状態であり、政府は自然権を守る個人の同意のもとに成立し、自然権が侵される時、政府を打倒する革命権を認めた³⁷⁾。

これらは進化心理学から見ると、ホブズの「万人の万人による闘争」は、ヒトの持つ社会性(所属集団、小規模血縁集団内の協力)を想定しておらず、むしろ社会性の存在しない動物の状態であるといえる(たとえ孤立性(単独で縄張りを持つような)動物でも同種への攻撃に際し、威嚇・服従などの抑制を持つことも知られている)。逆にロックは集団内の協力関係を小規模血縁集団以上的人数に拡大解釈しているといえる。しかし進化心理学が指摘するのは、所属集団の外ではまさに「万人(集団)の万人(集団)による闘争」である。また協力が成立した集団内における個体の合理的な選択は常に非協力(裏切り)となる。たとえ懲罰心理が働いても効果がない状況では、まさに集団内でも「万人の万人による闘争」(協力関係の消滅)となる。またホブズは暴

力の原因を「競争、不信、自負」としているが、競争はまさに進化的な生存競争であり、すべての生物が逃れられない。次の不信は、上記の個人の合理的な選択が非協力（裏切り）であることを見抜いている。最後の自負は、むしろ「名誉」と言い換えた方が理解しやすいのではないかとと思われるが、進化心理学でも論じた噂話（ゴシップ）を通じた社会的名声の問題である。具体的には「挑発に対して徹底的に戦う者か、甘んじて受け入れるか」という名誉の問題は、ホッブズの考える「万人の万人による闘争」状態（狩猟採集社会、古代の戦士、中世の騎士の時代、西部開拓時代、現代でも都市のスラムなどの無法地帯など³⁸⁾、致命的に重要であった。こういった点を考慮するとホッブズの暴力に対する考えは現在の進化心理学による理解と相当に整合性があるといえる。安西俊三先生は、福沢の啓蒙思想では、ウェイランドに従って、ロックの革命権を否定し、ホッブズに近いと指摘している³⁹⁾。その意味では、福沢の人間観と文明観の関係が、進化心理学に近いものになる理由の一つであると考えられる。

またホッブズは国家（リヴァイアサン）内での暴力の抑制を考えており、それは、ある意味でマキャベリの考えた国家における暴力契機（レヴェル）の縮減の実現である⁴⁰⁾（=暴力の独占⁴¹⁾）。しかしながら国家内での暴力の抑制が得られたとしても国家（リヴァイアサン）間の闘争は永遠に続くというカール・シュミットの指摘が残る。これは国家間、国際法、国際社会の問題であり、近代では国際法の発展の過程で、無差別戦争論になった⁴²⁾。帝国主義の19世紀の国際関係の中で、福沢の国際社会の理解も、ホッブズ的な外交のリアリズムに基づいており⁴³⁾、当時の国際法（万国民法）の文明の階位（文明、未開、野蛮）を理解し、国家による「野蛮の太平」や「文明の太平」を以下のように議論している。

「いわんやその外国交際の法の如きは、権謀術数至らざる所なしというのも可なり。……決して今の有様を見て直にこれを至善というべからず。今後数千年にして、世界人民の智徳大に進み、泰平安楽の極度に至ることあらば、（中略）……。文明は限りなきものにて、今の西洋諸国を以て満足すべきにあらざ

るなり。」(第十章)

これは更なる未来へと射程を見据えていた福沢の慧眼である⁴⁴⁾。

実は、21 世紀の国際社会に関して、進化心理学者ピンカーは「現代の社会の暴力は長い年月の間に減少し、今日人類は最も平和な時代を暮している」ことを、多様な社会科学の知見を用いながら、示している⁴⁵⁾。その中で、進化心理学でもホップズのリヴァイアサン効果（国家による暴力の抑制効果）が確認されている。しかしながら、2025 年現在のウクライナやガザの侵攻を見れば、福沢の目指す「文明の太平」がまだ遠いのは事実であろう。

②医学の素養、人間の共通性、文転した理系

次に指摘したいのは、福沢の若い頃、当時最高の蘭医塾で大阪にあった「適塾」⁴⁶⁾で受けた教育が、自然科学（物理学（窮理学）・化学や生理学など）を含む医学であったことを強調したい。

「蘭書なれば塾中医書にても物理書にても之を解すること甚だ易く」⁴⁷⁾

医学はただの自然科学ではない。そして現代においても医学は単なる自然科学の一分野ではない。医学は我々動物としてのヒト（Homo Sapiens）の生物学、物理学的・化学的側面のみならず、社会的存在である「人間」の価値判断を含む歴史的・政治的産物であるが、特に福沢において、生理学が西洋人でも日本人でも同じであると理解したことは、福沢の人間の理解の根底に、人類という共通の基盤を与えたと考えられる。これは進化心理学の基盤の一つでもある。

また医学は、人の死というシビアな面と向き合うことから実践的（プラグマティック）である必要がある（福沢の蘭学と、もう一つのプラグマティックでなければならない学問、軍事については大久保健晴先生の文献⁴⁸⁾を参照下さい）。

これも福沢の実践的プラグマティックな個性（後述）に合致した点が大きいのと考えられる。「血がきらい」だから医師にはならなかったが⁴⁹⁾、終生に

渡り、医学や自然科学に興味を持ち、「然るに福澤諭吉は医師に非ずして」としつつも、医学、生物学などのいろいろな意見を時事新報などで発表し、批評し続けた所以であると考えられる⁵⁰⁾。

医学に対する関心や関係は、松山棟庵の慶應医学所の開設や、その後の北里柴三郎先生の援助を通じて、私学として日本初の慶應医学部の開設にもつながっている。

これらを通して、『福翁自伝』の象徴的な事案として、初めて咸臨丸で渡米した際（1859）の福沢の感想があると考えられる。

「理上のことについてはすこしも肝をつぶすということはなかったが、一方社会上のことについては方角がつかなかった」と告白している点である⁵¹⁾。

これが福澤を後に社会科学に目を向けさせた動機ではないかと考えてる。つまり、福澤は「文転した理系」の学者であったと考えるわけである（もちろん当時、理系や文系といった区別はなかったが、現代的な視点で敢えて表現すると）。ホップズもそうだが、唯物論的（機械論的）世界観である自然科学的理解に福沢が親しかったと言え、理系の素養が自然科学の一分野である進化心理学と相性をさらに高めたと考えられる。

ホップズ自身、中世と近世の境に位置する哲学者とされ、その科学観はそれ以後のロックなどと違い、哲学と科学の未分化な面が指摘されている⁵²⁾。もうひとり、同じタイプの哲学者としてハーバード・スペンサーが指摘されているが、福沢諭吉とスペンサーの関係についても、安西俊三先生の論考がある⁵³⁾。福沢とホップズ、スペンサーの親和性は、偶然ではなく福沢諭吉の哲学と科学が未分化な点、「文転した理系」という点があるかもしれない。ただし、これにより、福澤を一理系学者として矮小化するとは、思っていない。それは上記にもあるホップズを超える視野の広さがあるからである。

また『福翁自伝』に描写があるが、この適塾時代に科学実験を経験していることが、翻訳のみならず経験として理解する「実学」につながっていったと考えられる。蛇足ではあるが、慶応義塾大学の文系4学部（文経法商）に

において、文系向けとしては非常に珍しい実験科目（物理学、化学、生物学）が存在するのは、創設者としての上記の教育理念を実現したものだと考えられる⁵⁴⁾。

③ WEIRD 理論と福沢諭吉の個性（パーソナリティ）

最後にもう一点強調したいのはした福沢自身の個性（パーソナリティ）についてである。1つは前述のプラグマティックな個性についてである。『福翁自伝』に書かれているが、「自分は幼少の頃から神仏を信じなかった」と明言しているが、「稲」のご神体を入れ替え、神罰について「実験」をしたのは⁵⁵⁾、福沢の幼少からのプラグマティックなこの個性から生じたものであろう。藤田友治先生による「重要なことは、福沢は西洋のプラグマティズムを学んだから、先の思想になったのではなく、自己の教育、自己の投企によって、プラグマティストになったということであります。」⁵⁶⁾は重要な指摘だと考える。

またもう一点は、福沢は、その生まれや父親の子に対する願望から、『福翁自伝』に「門閥制度は親の仇で御座る」として慣習と血縁主義による身分制度を嫌ったと述べているが⁵⁷⁾、これも個性の表れとして挙げられるだろう。これはまた「天は人の上に人を作らず」という平等観、そして「貴賤の差は学ぶと学ばざるとにあり」という能力主義に結実していく。その一方で「独立自尊」を掲げ、独立を尊び、同時に非同調的な個性も持つ。「独立自尊」は福沢が、文明の目標として重視した道徳であるが、幼い頃より、孤立を恐れない非同調な傾向は見られる⁵⁸⁾。一方、後年、人間交際を熱心に勧めたように、偏見にとらわれない「非個人向社会性」を後天的に目指したともいえる。

この点に関して、近年、進化心理学で明らかにされた知見との比較を試みたい。進化人類学者のヘンリックが、心理学の多くの知見をメタ解析して明らかにした結果「心理学が求めているのは普遍的な人間の性質への洞察であるのに、しかしながら、実際の心理研究の大部分は、西洋の大学で、その学生を相手に行われており、これらの対象者の特徴は Western（西洋の）、

Educated（高等教育を受けた）、Intellectual（知的な）Rich（金持ちの）and Democratic（民主的な）people（人々）であり、彼らの心理特性が全世界的な心理特性からみると偏っていること」を明らかにし、略して WEIRD（ウィアード＝奇妙な人々）理論と名付けた⁵⁹⁾。このことは二節で論じた進化心理学の考察から行けば、遺伝的進化は同じ、累積的文化進化は多様という点と一致するが、WEIRD の人々の心理特性が全世界的には偏っていることは、この論文の指摘を受けるまで明らかになっていなかった。これらの被験者はデンマーク、ドイツ、ノルウェー、スイス、イギリス、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国、アルゼンチンなどで主にみられ、まさに西洋文明を主導してきた国の人々である。

これらの全世界と異なった心理特性（特に道徳に関しては）「普遍主義」であることが指摘されている。道徳的普遍主義とは道徳的個別主義と対称的に、「すべての人に斉しく該当する道徳的規範が存在する」と考え、社会共同体の有する独特の価値観においても、仲間や親族といった人間関係の影響下でも（逆だと縁故びいき = Nepotism）、この規範の有効性は変わらないと考える。具体的に言えば自分の友人であっても道徳判断においては特別扱いせず、結果、個人的に見知らぬ人に対してより協力的な「非個人的向社会性」を身につけているとされている。

また「非同調」的であることも特徴で、実際の行動、もしくは知覚された他者の行動に自身の行動を同調させるかという心理特性である（心理学では、アッシュ同調実験として、三本の線でいちばん短いものを選ぶという課題で、サクラの多くが間違ったものを選ぶとき、自身の判断を優先するかで確認する）。他にもいくつか特性はあるが、傾向として WEIRD people は「個人を中心的な道徳の単位とみなし、意図的に他人と協力関係を結びつつ、他人の行為をその意図を基準に評価する」と考えられている⁶⁰⁾。

更にヘンリックのチームは、この心理特性の歴史的な原因を、1000 年かけた西方教会（とくに教皇庁）の家族政策 Marriage and Family Plan (MFP) にあるとする結果を示し⁶¹⁾、MFP は、伝統的に親族関係で結ばれていた社会を、個人（血縁）よりも社会を重視する態度と、道徳的な意味で

の個人主義の成立を促した。この結果は西方教会の意図的なものではなかったが、家族間の財産の相続を倫理的に阻止することで、既存の家族・親族中心の社会構造を弱体化していった⁶²⁾。その結果、新しい社会関係（協力関係）を生み、それは個人主義と自発的な同意を基にした新しい道徳理論が生まれ、以前は、自然と社会の解釈において中心的な役割を担っていたのは「モラル（倫理）」だったが、次第に「事実」という通貨に置き換えられていった（＝科学の出現、事実（である）と倫理（べき）の分離（Be と To Be の分離）「ヒュームの法則」の出現⁶³⁾）。この新しい協力関係（非個人的向社会性）がきっかけになって、経済が大きく発展できたと説明されている。以前から家族関係と政治体制を論じた人類学者はいたが⁶⁴⁾、この考察は非常に衝撃的である。

福沢は 1835 年の江戸時代の生まれであるが、血縁主義と慣習で成り立つ「身分制度」を嫌う「非同調」的な個人でありながら「非個人的向社会性」を目指し、プラグマティックな行動を基に「事実」を重視し、事実の後に倫理を決める「相対的な価値判断」をする個性を持っていた。これは上記の西洋文明の発展の WEIRD 理論に一致する心理特性である。そしてこの WEIRD 理論は進化心理学から生まれているのである、

啓蒙主義の影響を受けた学者は福沢だけではなかったろう、また医学や自然科学を学んだ学者も福沢だけではなかったろう（両者から福沢が影響をうけたことは間違いない）。しかしながら、当時プラグマティックで、身分制度を嫌い、非同調的な個性（パーソナリティ）という 3 つ共兼ね備えた個人は稀有だったのではないだろうか。もちろんまだまだ仮説の段階ではあるが、江戸時代の生まれでありながら、西洋文明の心理特性と一致する個性をもった福沢だからこそ、書物と三度の洋行を通じて西洋文明を正確に理解し、現在まで通じる広大な文明観・人間観を持っていたのではないかと、私は考えている。福沢の個性に着目した研究では、福沢の強い家族愛に触れて「寂寥、孤独、孤立を恐れなかった強く逞しい彼の性格の実は他の反面、しかも、不可分の反面であったように私には思われる。」⁶⁵⁾とあるが、福沢の個性の多面的な側面からの理解がさらに必要だと考えている。

最後に福沢の個性（パーソナリティ）という点まで辿り着いてしまったが、このような視座を持つに至ったきっかけとして、高橋伸夫先生の精密な著作を読んだことを挙げておきたい。そこでは、対象の権力者の心理学的解析が資料を基に緻密に分析・解説され、政治と国家の行方としてどのように表出するかが詳述されていた⁶⁶⁾。本稿の解析の精度は比べることも恥ずかしいほど粗いが、ご容赦いただきたい。

五. 最後に

2008年の前稿の発表を機に、物理学教室の表實先生（物理学・天文学）に代わり、2009年より継続して慶應義塾福澤研究センター開催のオムニバス講義「近代日本と福沢諭吉 II」を担当させていただいている。毎年多くの学部学生が履修するが、福沢が理系のバックグラウンドをもつことや人間観・文明観が自然科学からも評価できることなどを解説すると驚いてくれる。また福澤研究センターでも2010年、2018年などに報告を、福沢諭吉協会では2023年に土曜セミナーで講演させていただいた。福沢研究の広い海の中で、末席におり異端ともいえる自分であるが、岩谷先生との交流をきっかけに、慶應義塾の創立者福沢諭吉の思想についていろいろと考えることができた。福沢研究の多面的展開の一助となればと思い、ここに拙稿を発表させていただいた。本文の文責はすべて著者にあることをここに明記し、読者諸賢のご指導ご鞭撻を賜れば誠に幸いである。

岩谷十郎先生、誠にありがとうございました。心よりの感謝を込めて、本稿を終わらせたいと思います。

参考文献

- 1) T. Tsubokawa et al, 'Pharmacological effects on mirror approaching behavior and neurochemical aspects of the telencephalon in the fish, medaka

- (*Oryzias latipes*), *Social Neuroscience*, 4:3 (2009), P276-286
- 2) 坪川達也、『福澤諭吉の人間観における負の要素—進化生物学的視点からの一考—』、慶應の教養学：慶應義塾創立 150 年記念法学部論文集 (2008) P353-362
 - 3) H ザウアー、『MORAL 善悪と道徳の人類史』、講談社 (2024)
 - 4) 坪川達也、『福澤諭吉の人間観の源流を求めて～ 1862 ロンドン、江戸から東京へ～』、福沢研究センター通信 第 29 号 (2018)、P6
 - 5) 森田理仁、『ヒトの行動に関する進化生物学的研究と社会の関係：社会生物学論争を踏まえて』、日本生態学会誌 66 (2016)、P549-560
 - 6) 今西錦司、『人間社会から遠い社会』、岩波新書 (1951)
 - 7) 岡健司、『テナガザルとヒトのブラキエーション』、バイオメカニズム学会誌、Vol. 44、No. 2 (2020)
 - 8) 中野毅、『人類進化と文化の形成—現代人間学考 2—』、創価人間学論集、4 (2011)、P27-55
 - 9) 入来篤史、『環境・遺伝子・神経活動との相互作用によるヒト認知進化誘導』、理研脳科学研究所小腸概念発達研究チーム HP、<https://bsi.riken.jp/first-okano/organization/lab/iriki.html>、(2025 年 9 月 30 日最終閲覧)
 - 10) S. Thibault et al, Tool use and language share syntactic processes and neural patterns in the basal ganglia, *Science*, Vol 374 (2021), Issue 6569, DOI: 10.1126/science.abe0874
 - 11) 中垣啓、『人間的知性の進化について—ダーウィンとウォレス—』(2008)、早稲田大学中垣研 HP、<https://nakagaki.w.waseda.jp/kagaku1-2.pdf>、(2025 年 9 月 28 日最終閲覧)
 - 12) J ダイアモンド、『銃・病原菌・鉄』上下、草思社 (2000)
 - 13) H ザウアー、前掲書 (2024)
 - 14) Andrew F.G. Bourke (2007) Social Evolution: Community Policing in Insects. *Current Biology*, Volume 17, Issue 13, R519-R520
 - 15) R ダンバー、『ことばの起源』、青土社 (1998)
 - 16) 荒木直人、日永田泰啓、只木進一、『SNS に現れるダンバー数とその起源—データ分析とモデル化—』、情報処理学会論文誌 Vol. 57 No. 1 (2016) 1-6
 - 17) S ピンカー、『心の仕組み—人間関係にどう関わるか』、日本放送出版協会

(2003)

- 18) 坪川達也、『感覚と欲求—魚の脳からヒトの脳まで』、身体医文化論 I 「感覚と欲望」、慶應義塾大学出版会 (2002)、P439-460
- 19) C レンフルー、『先史時代と心の進化』、ランダムハウス講談社 (2008)
- 20) A トフラー、『第三の波』、中央公論社中公文庫 (1982)
- 21) ER サーヴィス、『未開の社会組織：進化論的考察』、弘文堂 (1979)
- 22) 小泉龍人、『メソポタミアの都市と国家』、人類学研究所 研究論集、第 14 号 (2025)、P3-35
- 23) 桑原俊一、『文字の起源—古代オリエントの文字からギリシア・アルファベット文字へ—』、北海学園大学人文論集、第 42 号 (2009)、P127-162
- 24) E ギボン、『ローマ帝国衰亡史』、ちくま学芸文庫 (1996)
- 25) M アウレリウス、『自省録』、岩波文庫改版 (2007)
- 26) 坪川達也、前掲書 (2008)
- 27) 福沢諭吉著、松沢弘陽校注、『文明論之概略』、岩波文庫 (1986)
- 28) H ザウアー、前掲書 (2024)
- 29) 丸山眞男、『福沢諭吉の哲学』、岩波文庫 (2001)
- 30) 内井惣七、『進化論と倫理』、世界思想社 (1996)
- 31) H ザウアー、前掲書 (2024)
- 32) 安西敏三、『福澤諭吉の思想的源泉 J・S・ミルとの対話を中心として』、慶應義塾大学出版会 (2025)
- 33) 安西敏三、岩谷十郎、森征一編著、『福澤諭吉の法思想』、慶應義塾大学出版会 (2002)
- 34) AM クレイグ、『文明と啓蒙』、慶應義塾大学出版会 (2009)
- 35) 田畑茂二郎、『国際法 第 2 版』、岩波全書セレクション (2008)
- 36) T ホップズ、『リヴァイアサン』、ちくま学芸文庫 (2022)
- 37) J ロック、『完訳 統治二論』、岩波文庫新訳 (2010)
- 38) 山内進、『掠奪の法観念史』、東京大学出版会 (1993)
- 39) 安西敏三、『「学問のすゝめ」小考』、福澤手帖、193 (2022)
- 40) N マキャベリ、『君主論』、岩波文庫 (1998)
- 41) M ヴェーバー、『職業としての政治』、岩波文庫改版 (2020)
- 42) 田畑茂二郎、前掲書 (2008)
- 43) 小室正紀、『明治の国際主義—福沢諭吉の場合』、21 世紀アジア学研究、第

- 18 号 (2020)
- 44) 中村敏子、『福沢諭吉「一身の独立」から「天下の独立」まで』、集英社新書 (2024)
 - 45) S ピンカー、『暴力の人類史』、青土社 (2015)
 - 46) JZ パワース、『日本における西洋医学の先駆者たち』、慶應義塾大学出版会 (1998)
 - 47) 福沢諭吉、『福澤諭吉全集』、岩波書店 (1958) 一卷、P26、全集緒言、西洋事情、
 - 49) 大久保健晴、『福沢諭吉 最後の蘭学者』、講談社 (2003)
 - 49) 福沢諭吉、『福翁自伝』、慶應義塾大学出版会 (2007)
 - 50) 福沢諭吉、前掲書 (1958)、九卷、P370、時事新報論集二、(衛生上の注意) 明治十七年一月二十八日、大日本私立衛生会会合にて
 - 51) 福沢諭吉、前掲書 (2007)
 - 52) 桜井弘木、『トマス・ホップズにおける哲学と科学について』、星薬科大学紀要、第 13 号 (1971)、P25-37
 - 53) 安西俊三、『福沢諭吉と H・スペンサー「第一原理」』、法学研究、第 67 巻第 12 号 (1994)、P225-245
 - 54) 慶應義塾大学自然科学教育研究センター HP、『背景と理念』、<https://www.sci.keio.ac.jp/aboutus/philosophy/>、(2025 年 9 月 28 日最終閲覧)
 - 55) 福沢諭吉、前掲書 (2007)
 - 56) 藤田友治、『福沢諭吉の教育思想』、大阪経大論集、第 53 巻第 2 号 (2002)
 - 57) 福沢諭吉、前掲書 (2007)
 - 58) 福沢諭吉、前掲書 (2007)
 - 59) J. Hennrich, et al, The weirdest people in the world? BEHAVIORAL AND BRAIN SCIENCES (2010), Page 1 of 75, doi:10.1017/S0140525X0999152X
 - 60) H ザウアー、前掲書 (2024)
 - 61) J ヘンリック、『WEIRD (ウィアード)「現代人」の奇妙な心理：経済的繁栄、民主制、個人主義の起源』、白揚社 (2023)
 - 62) F ルブラン、『アンシアン・レジーム期の結婚生活』、慶應義塾大学出版会 (2001)
 - 63) D ヒューム、『人性論』、中公クラシックス (2010)
 - 64) E トッド、『世界の多様性 家族構造と近代性』、藤原書店 (2008)

福沢諭吉の文明観と人間観

- 65) 岡義武、『福沢諭吉—その人間的一側面について』、日本學士院紀要 36 (suppl) (1979)、P21-26
- 66) 高橋伸夫、『構想なき革命 毛沢東と文化大革命の起源』、慶應義塾大学出版会 (2025)